

感情の「わかりにくさ」に関する信念と 青年の孤独感・共感性の関係（Ⅱ）

橋本 巖・角田 豊*

（教育心理学研究室）

（平成4年4月27日受理）

問題と目的

他者の感情を理解するのが困難であることは、成人にとってはあまりにも当り前の常識なのかもしれない。しかし、「ひとの気持ちって、わかりにくいものですね」と話しかけたときに人が示す反応は、意外に多様である。もちろん、最初にその語りかけ（問いかけ）がどのような文脈でなされたかによるだろうが、その反応は、「ええ、本当に」という間髪をおかない全面的な賛成ばかりではない。問いの真意を探ろうとするのか、あるいは、付帯条件を考えているのか、少し間をおいてから「うん、まあ、そうですね」と少しためらいがちに答えがかえってくる場合がかなりある。もう少し具体的に言うと、例えば、おおむね賛成ではあるがその話題に参加することに一種の「羞恥」を感じていると見える人や、事実他人はわかりにくい、そのことを敢えて肯定したくはない（あるいは、それでいいとは認めたくない、信じたくない）と言外に匂わせる人などである。

このような事柄から、我々が半ば常識つまり、社会的な経験の積み重ねを通して獲得された知識一として共有している他者感情の「わかりにくさ」は、いくつかの側面に分けて捉えられると思われる。つまり、どんな場面でどんな意味での「わかりにくさ」が生じるか、という事実的知識に関する側面と、一般的に見られる「わかりにくさ」の体験をどのように意味づけ、「受け入れているか」という暗黙の信念としての側面とである。

本研究は、主に後者の信念としての「わかりにくさ」の側面に着目し、青年がどのような観点から他者感情の「わかりにくさ」を捉えているかを分析することを目的としており、すでに同様の問題意識から行われた橋本（1991）の知見を追検証しようとするものである。

個々の生活場面において、他者感情の「わかりにくさ」とは、相手の理解の停滞やつまずきの経験であると考えられる。上述した「わかりにくさ」の事実的知識やそれに対する評価・受け入れに関する信念は、個々の経験から獲得され、概念化・安定化されて保持されるようになると思われる（橋本、1987）。このような理論的観点と類似の提案が、青年の抱く他者理解への疑問・不信を扱った Chandler の一連の研究によって行われている。

Chandler（1975, 1987, 1991）は、認識の相対性が明確に理解され、一般的に獲得された一つの形態として、自分と同じ考え方をする人はだれもないのだという、孤独感へと発展する

* 鳴門教育大学 学校教育学部

可能性を描いている。つまり、Chandler (1975) によれば、社会的事象の認知に関する捉え方がひとりひとりの主観によって規定され、何か一つの絶対的基準によって判断することは不可能であるという気づきは、それ自体、青年が認識の相対性に気づいているという形式的操作期の重要な特徴である。しかし、そのような相対性に気づくことは、一方で認識論的孤独 (epistemological loneliness) とも呼ばれる他者からの疎外感を感じさせることになる。その感覚は、「相対性のめまい (vertigo of relativity)」とも呼ばれるぬぐい去りがたいものであるが、これが本研究で言う「わかりにくさ」の信念と共通すると思われる。特に、孤独感としての概念化は、他者感情の理解に取って重要な、人の内面生活の存在とその独立性の認識とも関わっており、興味深い。

Chandler によれば青年は客観主義的な見方をうまく転換できないがために、この孤独感に屈服し、いくつかの退行的な解決策にすがろうとしたり、他者全般を理解できないものと決めつけるステレオタイプを形成したりする。ここで問題になるのは高次の認識に至った結果生じるそのような気づきをいかに「引き受け」つつ、現実の理解を行うかということである。成人の多くは、個人の感情経験を理解しようとする際には、認識の客観性はある程度犠牲にし、「わかる」という際の基準を使い分けているように思える。あるいは、人間のものの見方の個別性を明確に認識した上で、なお他者理解は可能であると考え、現実には他者とかわることができるようになる。「わかりにくさ」の事実的知識としての側面については Chandler は明確に述べていないが、上記のような疑問・不信をどのように扱うかということは、事実的知識としての「わかりにくさ」への認識を生かして他者理解を行うか、それとも単に虚無的態度に陥るかという理解の自己制御過程にかかわる研究課題であり、我々がどのようなとき能動的な他者理解を發揮するかにも関わる問題である (橋本, 1992; 角田, 1991)。

橋本 (1991) は、上記の問題について、「わかりにくさ」の信念と孤独感尺度、共感性質問紙との関連を検討することで取り組んだ。孤独感については、落合 (1983, 1989) の孤独感尺度を用いている。この尺度は、他の孤独感研究 (例えば、Russel ら, 1978) のように「望ましい社会関係と現実の相違の認知」としてだけではなく、青年期の孤独感を、他者との相互理解・共感の可能性についての考え方、ならびに人間の個別性への気づき、という2つの次元から捉えようとしている点、及び発達的に変容するとしている点が特徴的であり、本研究の他者感情の「わかりにくさ」に関する仮説と共通している面がある。橋本 (1991) では、感情一般の「わかりにくさ」の信念の程度と、孤独感の関係分析から、「わかりにくさ」が他者理解の可能性を否定する方向の認識とは限らず、他者理解の可能性を認める傾向と、「わかりにくさ」の信念の強さとは同方向の相関を持つこと、同時に、自己 (人間) の個別性を明確に認識するものほど「わかりにくさ」の信念は強いことを見いだした。また、孤独感のあり方によって、他者の感情を理解する際に重視する行動特性や実際の行動傾向に相違があるか否かを、共感性を多側面から測定する質問紙を利用して検討した。その結果同じく他者理解の可能性を認めていても、個別性の気づきが異なると、他者感情の「わかりにくさ」を捉える観点が異なることを見いだした。

しかし、上記の知見のうち、「わかりにくさ」の信念は理解を可能と思う者ほど強いという相関は比較的低いものであり、どの程度一般的か疑問が残る。特に、Chandler の論考にあるような認識論的孤独に近いような強い孤独感を感じている者は被験者に含まれておらず、その点の検討をぬぎにして、「わかりにくさ」は、不信感とは無縁であると結論するのは早計であ

ろう。

また、被験者が他者の感情を理解するというをどのような観点から捉えているかを分析するために、自己の共感性評定だけでなく、「理想的理解者像」を各自想定させてその人物の共感性評定を行わせているが、自己の共感性と他者である理想像の共感性とが同一の観点から評定されているか否かは、感情を理解するという概念の意味の多様性を検討するために重要である。そのためには各々の観点における評定結果への多変量解析的手法の適用が有効であると思われるが、前研究では、質問項目数に対して被験者数が少数であるという問題があった。

本研究では、青年期より多くの被験者を対象とし、他者感情の「わかりにくさ」に関する信念と、孤独感・共感性の関係をさらに検討しようとするものである。

方 法

本研究の手続き及び質問紙の内容は、調査対象以外橋本（1991）とほぼ同一であるが、ここに再度説明・記述する。

1. 調査対象

被調査者は、国立大学大学生・大学院生114名（男子42名、女子72名）と、看護学校学生68名（男2名、女66名）、総計182名であった。

2. 手続と質問紙の内容構成

(1) 実施手続

「日常の対人関係やコミュニケーションのあり方を具体的に調べるもの」との指示を行い、授業時に一斉形式で無記名式で実施した。また、一部の大学生・大学院生には、持ち帰っての評定を認めた。

質問紙の実施順序は、孤独感尺度、共感性質問紙、「感情の理解に関する質問」と題した質問紙の順であり、所要時間は約30分であった。

(2) **孤独感尺度** 落合（1983）の作成した孤独感の類型判別尺度（LSO）を用いた。この質問紙は、人間同士の理解・共感の可能性についての感じ（考え）方の次元（対他次元LSO-U：9項目）と、人間の個別性の自覚についての次元（対自次元LSO-E：7項目）の2つの下位尺度計16項目から成る。項目の例としては、対他次元は、「人間は、他人の喜びや悩みを一緒に味わうことができると思う」「私の考えや感じを何人かの人はわかってくれると思う」などである。また、対自次元では、「私とまったく同じ考えや感じをもっている人が、必ずどこかにいると思う（逆転項目）」、「どんなに親しい人も、結局、自分とは別個の人間であると思う」などが含まれる。各項目について、自分にあてはまる程度を「はい」から「いいえ」の5段階（各項目とも、-2点から2点）で評定するが、得点化に際しては、対他次元では理解・共感できると思うほど高く、対自次元では、個別性に気づいているほど高くなるように採点される。

また、各尺度の得点（LSO-U：18点から-18点、LSO-E：14点から-14点の範囲に各々分布）の正負の組合せにより、FIG. 1に示すようなA、B、C、Dの4類型に分類される。なお、落合（1989）によれば、発達的には、対他次元の気づきが先行し、遅れて対自的

次元が自覚されるようになるという。すなわち、A型からD型への移行が青年期における主要な発達過程と考えられている。いずれかの次元が0点の場合、AD型、CD型の様な混合型（発達の的には、A型からD型への移行型とみなされる）が想定される。また、FIG. 1には、文章完成法及び事例の検討から見た孤独感類型の特徴が要約されている。

上記の項目例にもあるように、LSOでは「わかる（わかりあう）」という言葉で、理解の可能性について評定を求めているが、そこで言う理解がどのような過程や活動であるのかは不明確である。本研究では、次に述べる共感性質問紙を併せて実施し、被験者が「わかりにくさ」や「わかり合う」という過程をどのように捉えているかの分析に利用することにした。

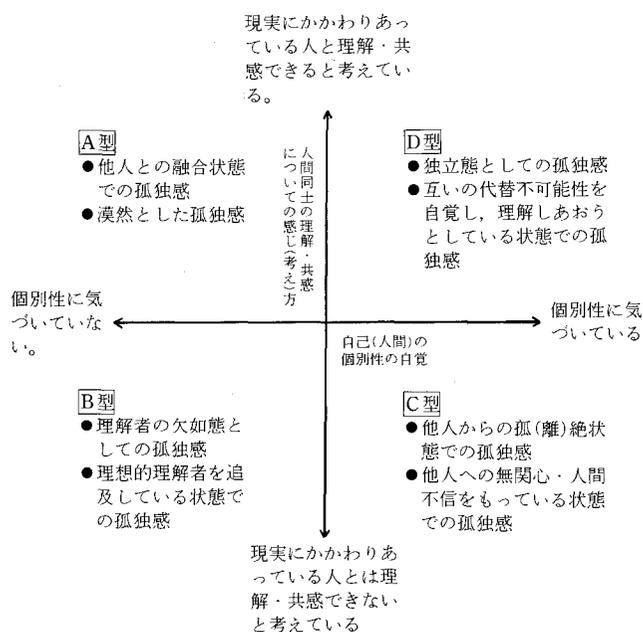


FIG. 1 孤独感の規定因構造と4つの類型の特徴 (落合, 1989)

(3) 共感性質問紙 角田(1986)が、高校生を対象として共感性を検討するため、Davis (1980)による Interpersonal reactivity index 及び加藤・高木 (1980)の情動的共感性尺度を一括して因子分析し、新たに作成した共感性尺度である。本研究では項目番号のみ原尺度と変更して用いた (Table 3 参照)。Table 3 に示すように、独立した5つの下位尺度からなる：Ⅰ 他者理解の拒否 (冷淡さ)、Ⅱ 圧迫的な感情伝播 (感情的な被影響性)、Ⅲ 空想、Ⅳ 感情的暖かさ (共感的な関心)、Ⅴ パースペクティブ・テイキングで、計37項目であり、各項目について「非常によくあてはまる」か

ら「まったくあてはまらない」までの7段階評定を行わせる。ところで、Batsonら (1987)によれば、この種の自己報告式の質問紙で測定される共感性には、反応・行動傾向の正確な自己記述だけでなく、自己呈示 (自分をどの様に見たいか、人からどう見られたいか) における個人差がかなりの程度反映されるという。すなわち回答内容には、被験者の反応・行動傾向だけでなく、自己概念や価値観が含まれると指摘されている。本研究では、このような問題性をむしろ「利用」して、自己評定後に「他の人の気持ちや感情を理解する能力が非常に高い人 (理想像) がこの質問紙に回答するとしたら、各々の内容はその人にどの程度あてはまると思えますか」という教示により再度評定を行わせ、被験者が重視している共感的理解の信念をより顕在化させて引き出すことを試みた。

(4) 「感情の理解に関する質問」 この質問紙では、「『他の人の気持ちはわかりにくいものだ』という考え方についてどう思いますか」という、他者感情の「わかりにくさ」についての信念に関する質問がなされ、その「考え方」への賛成の程度を全く賛成 (=非常にわかりにくい: 7) から全く反対 (=非常にわかりやすい: 1) までの7段階尺度で回答させた。これは、他者感情の理解に伴う「わかりにくさ」の経験と、それに関する対処、知識などを検討するた

めに行われている一連の研究に用いられた質問紙であり、その他に、「わかりにくさ」の経験に関する質問（橋本，1990で用いられたものと同様の自由記述）と、「わかりにくさ」に関する考え方や、知識を問う質問を含んでいる。なお、橋本（1990b, 1991）では、信念評定の際の質問を「人の」気持ちの「わかりにくさ」としているが、報告された経験内容は他者理解に関するものであった。そこで本研究では、より明確に表現するため、「他の人の」と表記をあらためた。橋本（1991）と同様、本論文でも「わかりにくさ」の信念に関する評定値に関する結果についてのみ報告する。

結果および考察

I. 他者感情の「わかりにくさ」の信念と孤独感のタイプ並びに尺度得点との関係

1. 孤独感尺度 (LSO) による孤独感タイプの分類

Table 1に、男女別にみた孤独感タイプの分布を示す。男女数に開きはあるが、各タイプの出現率に明確な性差があるとは言えないであろう。全体として、A, AD, D型が9割以上にのぼり、ほとんどの被験者が人間同士の理解・共感を可能で

Table 1 孤独感の各タイプの出現率 (度数)

| | A | AD | D | CD | C | 計 |
|----|---------------|--------------|---------------|-------------|-------------|--------------|
| 男 | 22.7 (10) | 9.1 (4) | 61.4 (27) | 2.3 (1) | 4.5 (2) | 100 (44) |
| 女 | 29.7 (41) | 6.5 (9) | 56.5 (78) | 2.9 (4) | 4.3 (6) | 100 (138) |
| 全体 | 28.0 (51) | 7.1 (13) | 57.7 (105) | 2.7 (5) | 4.4 (8) | 100 (182) |

あると考えている者である。一方、自己（人間）の個別性を明確に自覚している者はD, CD, C型であり、約65%を占めている。そしてこれら両次元を共に明確に自覚しているD型が60%で、最も多数である。この分布傾向は、橋本（1991）及び、落合（1989）の大学生における結果と基本的に一致している。なお、より多くの被験者を対象とした結果、理解の可能性を明確に自覚しないC, CD型が少数ながらサンプルに含まれている。

2. 「わかりにくさ」の信念と孤独感との関係

全被験者を対象として、「わかりにくさ」の評定値とLSOの下位尺度得点との相関計数(r)を算出した結果、前研究同様に、いずれの次元とも低くかつ有意な正相関が見いだされた（共感性次元と.22, 個別性次元と.24; いずれも $p < .05$, $df = 180$ ）。相関の方向性に着目すると、全体として、他者の「わかりにくさ」を自覚する傾向は自他の理解・共感の可能性を信じる程度と相反せず共存していること、及び「わかりにくさ」の信念の強さは、自己の個別性の自覚が明確であるほど強いことが示唆される。これらは前研究を支持する結果である。

さらに Table 2によってLSOの各類型と「わかりにくさ」の関連を検討した。表から明らかのように、D, CD, C型では「他の人の気持ちはわかりにくいものだ」という考えに「かなり賛成」「非常に賛成」という者が最多であるが、A, AD型では、「どちらかという賛成」という、やや条件付きの態度で賛成している者が多い。また、A, AD型には「わかりにくさ」に反対するか判断保留を選ぶ者が3-4割存在するのに対して、D, CD, C型にはそれらはほとんど見られない。D型は最も多数であることもあり、それらの中間的な分布を示している。つまり、「わかりにくさ」への賛成度とLSOの下位尺度2つはともに正の相関を示したが、自己の個別性を明確に認めるか否かという点が特に他者感情の「わかりにくさ」の信念の強さ

Table 2 孤独感の各タイプにおける「わかりにくさ」評定での回答カテゴリーの比率（度数）と平均賛成度

| | | 回答カテゴリー | | | | | | | 平均 (S D) | |
|------------|----|------------|-------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|-------------|
| | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | | |
| 孤独感 タイプ | A | 0 (0) | 7.8 (4) | 9.8 (5) | 19.6 (10) | 33.3 (17) | 13.7 (7) | 15.6 (8) | 100 (51) | 4.82 (1.42) |
| | AD | 0 (0) | 0 (0) | 15.4 (2) | 15.4 (2) | 30.7 (4) | 15.4 (2) | 23.0 (3) | 100 (13) | 5.15 (1.34) |
| | D | 1 (1) | 0 (0) | 1.9 (2) | 7.6 (8) | 39.0 (41) | 41.9 (44) | 8.6 (9) | 100 (105) | 5.43 (.93) |
| | CD | 0 (0) | 0 (0) | 0 (0) | 0 (0) | 20.0 (1) | 60.0 (3) | 20.0 (1) | 100 (5) | 6.00 (.63) |
| | C | 0 (0) | 0 (0) | 0 (0) | 0 (0) | 37.5 (3) | 0 (0) | 62.5 (5) | 100 (8) | 6.25 (.96) |
| | 全体 | .5 (1) | 2.2 (4) | 4.9 (9) | 11.0 (20) | 36.2 (66) | 30.7 (56) | 14.2 (26) | 100 (182) | |

注：回答カテゴリーは、1＝全く反対である、2＝ほとんど反対である、3＝どちらかというところと反対である、4＝どちらともいえない、5＝どちらかというところと賛成である、6＝かなり賛成である、7＝非常に賛成である

とかかわっていることがまずわかる。しかし同じく「わかりにくさ」と正相関した理解可能性の次元をも明確に認めること（D型）は、さらに「わかりにくさ」の信念を強めるのではなく、むしろ個別性のみを自覚すること（C、CD型）よりも穏やかな傾向を示させている。つまり、個別性の次元と、理解可能性の次元をどのように自己の中で「折り合わせて」いるかによって他者感情の「わかりにくさ」の信念にも相違が生じると思われ、社会的存在としての自己の孤独感に対する「見方」の質的な相違と、他者感情の「わかりにくさ」の信念とが密接な関係を持っていることが確認されたといえよう。なお、Table 2 右欄に示した、各タイプの「わかりにくさ」平均評定値の対比較（t検定）からも、A+AD型<D型（ $t = .269$ $df = 96$, $p < .05$ ）、D型<C+CD型（ $t = 2.63$, $df = 116$, $p < .05$ ）という相違が示された。

落合（1989）によれば、孤独感のタイプの青年期内における発達の変化は、基本的にA型からD型へ移行するものが大多数である。また、その過程でB、C型を示すものが存在するが、これらもD型へと移行していく場合が多いという。このような方向性との関連で「わかりにくさ」の変化の方向性を推測すると、まず、他者理解の可能性を信じる態度を保持しながら、個別性の自覚が明確化するにつれて他者感情の「わかりにくさ」を認めるようになるという多数傾向があろう。しかし中にはその過程で一度個別性のみを自覚し理解可能性は否定するという孤独感を抱き、それ故に他者の強烈的な「わかりにくさ」を意識するC、CD型の時期を経て、再び理解可能性を認める中で、D型のようにやや緩和された形で「わかりにくさ」を認めるようになる者も存在するのかもしれない。

以上の結果を踏まえ、以下の共感性質問紙との関連の分析では、A+AD型、D型、C+C D型の3群を比較することにより、これらの孤独感タイプの者が他者感情の「わかりにくさ」を評定する際の観点の特徴を明らかにしたい。

II. 他者感情の「わかりにくさ」の信念と共感性の関係に及ぼす孤独感タイプの影響

橋本（1991）では「孤独感の各類型に分類された被験者らは、他者を理解すると言うことをどのように捉えているのだろうか。また彼らのそのような他者理解に関する信念は、『わかり

にくさ』の評価とどのような関係を示すのだろうか」との関心から、「被験者自身の他者理解傾向を角田（1986）の共感性質問紙で測定した後、他者理解の際にどのような特性が特に重要と見なされているかを、仮定の理想的理解者が評定したらどのようなようになるかという質問」を行って検討しようとした。そこでは、いずれの観点からの評定でも同一の下位尺度が採用されていたが、それぞれの観点によって項目の意味あいが増減し、因子構造が異なることも予想される。本研究ではこの点の検討をまず行い、その結果にしたがって上記の目的を検討する。

1. 自己及び理想的理解者像の共感性評定に関する因子分析

Table 3 に本研究で用いた共感性質問紙の全項目と、角田（1986）の見いだした下位尺度を示す。また、2つの観点の各々で得られた因子構造と、それに基づいて新たに下位尺度として選ばれた項目の右に、対応する下位尺度の番号を示している。因子数の決定及び項目の選択は、角田（1986）の原尺度とできるだけ共通であり、かつできるだけ多様で解釈可能な因子構造を見いだすことを目標として行われた。自己及び理想像の各々のデータについて主因子法で得られた初期解で固有値1以上を基準として因子数を選択し、バリマックス回転を行った。次に、特定の因子のみに.40以上負荷し他の因子には.31以上負荷していない項目（但し単一因子に.50以上負荷していれば、他に.31以上でも採用）で、かつ原尺度の意味から解釈可能な項目のみを新たな下位尺度の候補とし、併せて因子の解釈を行った。そして、これら「候補」の項目のみを用いて同一因子数で再度因子分析し、そこでも上記の負荷傾向の基準が満たされ、第一次の結果から大きく変動しないことを確認した後にその因子解・下位尺度を最終的に選択した。

この手続きの結果、自己の共感性（より正確には対人感受性と呼ぶべきか）については、原尺度の「感情的暖かさ」にあたる項目が安定せず5因子解は得られなかったが、Table 3の4因子解が固有値1以上で最も多い因子数である。一方、理想的理解者の共感性については、第一次の因子分析で3因子解（空想性が独立）が得られたが、再因子分析の際の変動が大きいため、2因子解を検討し、表のような結果を得た。

本分析から得られた各々の下位尺度は、負荷項目の内容と原尺度の対応から次のように解釈・命名できよう。

理想的理解者の共感性において第一因子は原尺度の「他者理解の拒否（冷淡さ）」「空想（感情移入傾向）」「感情的暖かさ（共感的関心）」「パースペクティブ・テイキング」にまたがっており、「他者感情への愛他的な関心・配慮の傾向」と命名できよう。なお、以下の分析では、他者理解の拒否に該当した項目はこの尺度の逆転項目とみなして再得点化し尺度得点を求めた。また第二因子は原尺度の「圧迫的な感情伝播」のままで、他者の感情からの影響の受けやすさ（被影響性）と動揺しやすさの因子である。ここでは「動揺しやすさ」と呼ぶ。

自己の共感性については、原尺度との対応通りに解釈できる。すなわち第一因子「他者理解の拒否」、第二因子「動揺しやすさ」、第三因子「空想」、第四因子「パースペクティブ・テイキング」である。ただし、第一因子は理想像の得点化と一貫させるため、「他者感情への愛他的関心」の逆と考え、逆転して尺度得点化した。

予想されたように、自己の対人的感受性と、他者である理想的理解者の共感性とは、異なる観点から評定されていた。後者は、前者に比べ、より単純な構造になっている。ただし、どちらも「動揺しやすさ」（Davis, 1980では Personal Distress）と想定された項目のほとんどが、常に一つのまとまりをなして第2因子に負荷している点は共通であり、興味深い。

Table 3 自己及び理想像の共感性評定の因子分析 (バリマックス回転後)

| 共感性質問紙 (角田, 1986) の下位尺度と項目 | 自 己 | | | | | 下位 尺度 | 理 想 像 | | | |
|--|----------------------------|-------|-------|-------|-----|----------|-------|----------|--|--|
| | F 1 | F 2 | F 3 | F 4 | F 1 | | F 2 | 下位 尺度 | | |
| I. 他者理解の拒否 (8項目) | | | | | | | | | | |
| 3. 私は他人の涙を見ると、同情的になるよりもいらだってくる。 | -.60 | .07 | -.05 | -.04 | 1 | -.25 | -.12 | | | |
| 9. 私はまわりの人が悩んでいても、平気でいられる。 | -.64 | -.08 | .01 | .37 | 1 | -.32 | -.13 | | | |
| 15. 私は人が嬉しくて泣くのをみると、しらけた気持ちになる。 | -.58 | .03 | .06 | .14 | 1 | -.63 | -.05 | 1 | | |
| 22. 他人の不幸に対しても、通常私はひどく動揺することがない。 | -.55 | -.20 | .16 | .28 | 1 | -.37 | -.23 | | | |
| 24. 私は誰かがけがをするのを見ても、平静を保っている傾向がある。 | -.56 | -.24 | .08 | .04 | 1 | -.34 | -.45 | | | |
| 25. 私は友人が悩みごとを話しはじめると、話をそらしたくなる。 | -.46 | .07 | .29 | -.02 | 1 | -.53 | .00 | 1 | | |
| 27. 私はまわりが興奮していても、平静でいられる。 | -.39 | -.42 | -.01 | -.02 | | -.23 | -.62 | | | |
| 36. 時々私は他人が問題を抱えている時に気の毒だと思わないことがある。 | -.63 | -.05 | -.00 | .23 | | -.59 | -.07 | 1 | | |
| II. 圧迫的な感情伝播 (11項目) | | | | | | | | | | |
| 4. 私は誰かが緊急事態でとても助けを必要としているのを見ると動揺する。 | .11 | .43 | -.06 | -.15 | 2 | .08 | .54 | 2 | | |
| 5. まわりの人が神経質になると、私も神経質になる。 | .01 | .54 | .06 | -.18 | 2 | .03 | .57 | 2 | | |
| *7. 私は他人の感情に左右されずに決断することができる。 | -.05 | .58 | .02 | .15 | 2 | .09 | .66 | 2 | | |
| 10. 私は緊急の間は自分をコントロールできない傾向がある。 | -.14 | .58 | -.04 | .16 | 2 | -.05 | .63 | 2 | | |
| 11. 私は感情的にまわりの人から影響を受けやすい。 | .12 | .67 | -.24 | .01 | 2 | .15 | .73 | 2 | | |
| 14. 私はよく、目の前でおこる事に深く影響される。 | .07 | .54 | -.36 | -.00 | 2 | .29 | .53 | 2 | | |
| *16. 私はたいいてい緊急の場合にも、とても効果的にふるまう。 | -.01 | .50 | .11 | .07 | 2 | -.08 | .59 | 2 | | |
| *17. 私は友人が動揺していても、自分まで動揺してしまうことはない。 | .20 | .46 | .11 | .03 | 2 | .13 | .63 | 2 | | |
| 21. 私は悪い知らせを人に告げに行く時には、心が動揺してしまう。 | .27 | .40 | -.19 | -.27 | 2 | .39 | .56 | 2 | | |
| 30. 私はとても感情的な状況におかれると、時々どうすることもできないと感じる。 | -.07 | .49 | -.17 | .04 | 2 | .12 | .66 | 2 | | |
| 34. 緊急に何かしなければならぬ場合、私は不安で落ち着かない。 | -.03 | .62 | -.10 | .01 | 2 | -.01 | .63 | 2 | | |
| III. 空想 (9項目) | | | | | | | | | | |
| 1. 私は愛の歌や詩に深く感動しやすい。 | .28 | .10 | -.36 | -.17 | 3 | .65 | .06 | 1 | | |
| 6. 私はおもしろい小説を読んでいると、話の中の出来事が自分に起こったらどうだろうかと思ってみる。 | .04 | -.05 | -.62 | .01 | 3 | .64 | .14 | 1 | | |
| 12. いい映画を見ると私はとても容易に自分を主人公の立場に置くことができる。 | .03 | .10 | -.76 | .06 | 3 | .50 | .25 | 1 | | |
| 20. 劇や映画を見たあと、私は登場人物のひとりであるかのように感じたことがある。 | -.07 | .09 | -.72 | -.12 | 3 | .62 | .26 | 1 | | |
| 23. 私は映画をみる時つい熱中してしまう。 | .23 | .11 | -.56 | -.14 | 3 | .56 | .19 | 1 | | |
| *26. 良い本や映画にひきこまれることは私にはあまりない。 | .25 | -.12 | -.56 | -.01 | 3 | .56 | .32 | 1 | | |
| *33. 私は普通映画や劇をみてても客観的で完全に心を奪われることはない。 | .30 | .07 | -.53 | .05 | 3 | .39 | .30 | | | |
| 35. 私は本当に小説の主人公の感じ方にひきこまれる。 | .05 | .01 | -.65 | -.04 | 3 | .58 | .29 | 1 | | |
| 37. 私はよく自分に将来起こるかもしれない事を夢想したり空想したりする。 | -.06 | .16 | -.46 | -.05 | 3 | .24 | .17 | | | |
| IV. 感情的暖かさ (5項目) | | | | | | | | | | |
| 13. 私は身寄りのない老人を見ると、かわいそうになる。 | .25 | .16 | -.21 | -.31 | | .66 | .06 | 1 | | |
| *18. 私は時々誰かが不当に扱われるのを見てもそれほど同情しない。 | .55 | -.19 | -.19 | -.28 | | .47 | .02 | 1 | | |
| 19. 私は動物が苦しんでいるのを見ると、とてもかわいそうになる。 | .39 | .01 | -.12 | -.08 | | .59 | .09 | 1 | | |
| 29. 私は大勢の中で一人ぼっちの人を見るとかわいそうになる。 | .20 | .29 | -.11 | -.37 | | .57 | .08 | 1 | | |
| 31. 私は誰かが利用されているのを見ると、多少守ってあげたい気になる。 | .23 | .00 | -.31 | -.40 | | .65 | .05 | 1 | | |
| V. パースペクティヴ・テイキング (4項目) | | | | | | | | | | |
| 2. 他人を批判する前に、私はその人の立場ならどうかを考えてみようとする。 | .18 | -.23 | -.02 | -.59 | 4 | .62 | -.11 | 1 | | |
| 8. 私は誰かに気持ちを動転させられる時、たいいていしばらくその人の立場に自分を置いてみようとする。 | .16 | .03 | -.05 | -.59 | 4 | .62 | .04 | 1 | | |
| 28. 私は時々、友人の視野で物事はどのように見えるのかを考えて、友人をより理解しようとする。 | .10 | -.09 | .02 | -.57 | 4 | .68 | -.04 | 1 | | |
| 32. 私は自分で決める前に、反対意見の人々の立場を考えようとする。 | .00 | -.04 | .03 | -.53 | 4 | .62 | .13 | 1 | | |
| | 固有値 | | | | | | 7.81 | 5.36 | | |
| | 注: アスタリスタの項目は、原尺度における逆転項目。 | | | | | | 21.10 | 35.60 | | |
| | 累積寄与率 | | | | | | | | | |
| | 9.83 | 19.76 | 29.96 | 36.23 | | | | | | |

理想像の評定において2因子解を想定した状態での項目の分類形態は、他者に対する代理的感情を Personal Distress と愛他的感情(あるいは共感的感情)とに区別する Batson ら(1987)の考え方と共通する点がある。Batson らの区別は、特定の状況下で喚起される代理的感情(situational empathy)の質を区別しようとして提案されたものであり、他者への共感的反応傾向の個人差(dispositional empathy)とは理論的に異なるものであるが、上記の概念化からわかるように、いずれの側面も感情としての共感に関わるものである。従って、本研究の理想像の2因子解の結果が Batson らの尺度と共通するならば、被験者らが理想像の評定の過程で考えた「気持ちの理解」の姿は、情動的共感としての性質を強く帯びていたと推測される。そして、自己の共感性評定においては、この内の愛他的側面がより分化して考慮されたと思われる。

それでは、これらの共感性の側面を、孤独感の各タイプの者はどのように重みづけているだろうか。

2. 各孤独感タイプにおける共感的傾向と理想像の評定

各尺度によって項目数が異なるため、尺度の合計得点の平均値を代表値とし、さらにその得点の孤独感類型別平均値を Table 4 に示す。なお、以下の分析では被験者数が著しくことなるので、分散分析後の下位検定については行わず、表から顕著な傾向についてのみ述べる。

まず、右欄の理想的理解者の共感性については、3(孤独感タイプ)×2(下位尺度)の2要因分散分析の結果、孤独感タイプ($F = 3.52, df = 2/179, p < .05$)と、下位尺度($F = 276.01, df = 1/179, p < .01$)のそれぞれの主効果が有意であったが、交互作用は見いだされなかった。まず表から明らかのように、尺度I「他者感情への愛他的な関心・配慮」は尺度II「動揺しやすさ」より理想的理解者の特性として共通に重視されている。また孤独感タイプの間には、C、CD型は他のタイプよりも2側面の特性を理想像の特性として低く評定することが見られる。落合(1989)によれば、理解者を希求する傾向は孤独感タイプによって相違があり、他者理解の可能性を認めず個性に気づいているC型は、他の類型より理解者を求める者が有意に少なかった。本来、今は周囲に存在しない理解者を求めようとしないならば、どのような特性を示されても該当しないと評定しがちになることが予想される。上記の主効果もその傾向の反映と考えられるが、本研究の質問紙に含まれる行動傾向としての特性とは異なった質問をさらに行った場合にも上記のような効果が認められるか否かは残された問題であろう。

次に、自己の共感性評定についても、3(孤独感タイプ)×4(下位尺度)の分散分析を行った。その結果、孤独感タイプ($F = 5.89, df = 2/179, p < .01$)、下位尺度($F = 21.53, df = 3/537, p < .01$)の各主効果と、孤独感タイプ×下位尺度の交互作用($F = 5.05, df = 6/537,$

Table 4 孤独感の各タイプにおける理想的理解者及び自己の共感性評定の下位尺度別平均値(標準偏差)

| | 自己の共感性 | | | | 理想的理解者の共感性 | |
|---------|----------------|---------------|---------------|----------------|---------------|----------------|
| | I | II | III | IV | I | II |
| A型, AD型 | 5.59 (.70) | 4.77 (.77) | 5.35 (.81) | 4.59 (.93) | 6.28 (.78) | 3.92 (1.48) |
| D型 | 5.42 (.72) | 4.68 (.73) | 5.21 (.85) | 4.56 (.73) | 6.34 (.68) | 4.00 (1.34) |
| C型, CD型 | 4.76 (1.08) | 5.31 (.73) | 5.46 (.87) | 3.94 (1.19) | 5.84 (.83) | 3.39 (.96) |

$p < .01$) がいずれも有意であった。交互作用について見ると、A、AD型とD型は、それぞれの群内の尺度間の相違のあり方が類似しているのに対して、C、CD型は別種の変動を示している。その対照が比較的明確な尺度I、IIのそれぞれにおける数値を見ると、他者感情への愛他的関心を自己の特性とする程度には $D > C$ 、CD、また動揺しやすさについては $C, CD > D$ という傾向が読み取れる。ここからは、孤立的で他者への愛他的な関心が低いとみえるC、CD型が、他者と無関係に安定しているのではなく、むしろ影響を受けて動揺しやすい面のあることが推測される。また、どの群も比較的低いパースペクティブ・テイキングにおいても、C、CD型は特に低く、「あてはまらない」という自覚が強いと思われる。人間の個別性を自覚することは、相手の独特な視点を考慮したパースペクティブ・テイキングにとって必要であるが、同じく個別性を自覚していても、理解可能性を認めるか否かによってそこに相違が生じるのであろうか。

以上の分散分析と表の視察からの知見の中、A、AD型とD型が類似の程度の評定をし、群内の尺度の重み付けも似ているという点は、橋本(1991)でも見いだされている。従って、自他の理解・共感を基本的に肯定する者が評定した他者感情の理解の特性(自己についても理想像についても)は、個別性の自覚に相違があっても、大差ないことが推測される。しかし、理解可能性を認める者と認めない者との間には質的な相違があると思われ、今後詳細に検討すべき課題として残された。

では、これらの傾向は、他者感情の「わかりにくさ」の信念の強さとどの様に関連するだろうか。

3. 孤独感の各タイプにおける「わかりにくさ」の信念評定と共感性評定の相関

Table 5に、他者感情の「わかりにくさ」の評定と共感性評定の相関を示す。ここでは、橋本(1991)と基本的に共通の結果が示されている。

第一に、どの孤独感タイプでも「わかりにくさ」の信念の強さと相関を示すのは、理想像の評定結果でなく、現在の自分についての共感性評定である。他者の「わかりにくさ」は、現実に出会う他者に関係はあるが一般化された他者についての評定であり、一方理想像の共感評定は他者に関するものであるが、仮想である。また自己の共感評定は現実の行動に関するが、評定対象は他者ではない。これらの相違と、得られた相関値を考えあわせると、一般的に我々が共有している他者感情の「わかりにくさ」の信念は、実は他者一般の属性というより、他者を理解しようと試みる我々自身の理解過程の性質を反映しているものであると示唆されよう。

第二に、「わかりにくさ」の信念と有意な相関を示した尺度を見ると、A、AD型では自己の「動揺しやすさ」、D型では「空想」となっている。尺度を構成する項目内容に若干相違はあるが、これも橋本(1991)の結果と類似である。「動揺しやすさ」については、自己・理想像いずれの評定でも見いだされた因子であり、理想像の評定からどの群もあまり望ましい特性

Table 5 孤独感の各タイプにおける「わかりにくさ」の評定値と共感性評定の相関 (** $P < .01$, * $P < .05$)

| | 自己の共感性 | | | | 理想的理解者の共感性 | |
|---------|--------|-------|------|------|------------|-----|
| | I | II | III | IV | I | II |
| A型, AD型 | .11 | .33** | -.07 | -.12 | -.08 | .21 |
| D型 | -.00 | .02 | .27* | -.16 | .14 | .02 |
| C型, CD型 | .77** | .19 | -.09 | .36 | -.21 | .24 |

としては考えていないことがわかる。さきに理想像の因子分析結果について考察し、して関心を維持しながら理解するのでなく、自他の相違を見失い、自己の問題へと注意が逸脱する傾向（egoistic drift；Hoffman, 1984）と見なすことができる。つまり他者の感情に接して他者志向的であり続けることができず、自己志向的になりがちである傾向である。そしてこの傾向がA, AD型でのみ「わかりにくさ」と関連するのは、このような自他の相違を自覚する程度に、人間の個別性を自覚する程度が関わっているからと解釈できよう。しかし、D型における空想性の高さと「わかりにくさ」との正相関がどのような過程に影響されているかについては、「動揺しやすさ」に関するような解釈は現時点ではできない。最後に、本研究で着目したC, CD型においては、他のタイプと異なる第一尺度得点と「わかりにくさ」の相関がみられる。これは、「他者感情への愛他的関心」が高い者ほどわかりにくさを認めやすいという内容の相関である。このタイプがLSO分類では理解・共感の可能性を否定する者であることから、人間の理解に必要な相互受容の可能性については不信ないしは疑問を抱いていると想像される。そのような者が、何らかの理由で他者感情への愛他的関心を抱くとき、共感しようにもできない自分と直面することになり、「わかりにくさ」を意識するのも知れない。

Ⅲ. まとめ

以上、Ⅰ・Ⅱの分析結果から、橋本（1991）で見いだされた他者感情の「わかりにくさ」に関する信念と青年の孤独感・共感性の関係に関わる知見は、基本的に支持された。同時に、少数ではあるがC, CD型を含めたことで、更に知見が拡大・修正された。総合して言えば、孤独感類型と「わかりにくさ」の関係の分析から、他者感情の「わかりにくさ」を考える上で、共感性次元と個別性次元の組合せが重要であることが確認された。つまり、人間相互が理解・共感できると思うか否か、人間の内面の独立性を認めるか否か、という2つの認識・信念が個人の中でどのように組み合わせられ統合されているか（Chandler（1975）に従えば、どう「折り合い」をつけているか）によって、「他の人の気持ちはわかりにくいものだ」という考えへの賛成度の強さと、その賛成度を評定する際の観点（自己の共感性のどの側面との関連であるか、ということ）が異なるのである。

このことは、他者感情の「わかりにくさ」の原因知識を分析した橋本（1990b）の結果や、「わかりにくさ」の経験事例の分類において橋本（1990a）が見いだした結果と照らし合わせると一層興味深い。

前者では、「わかりにくさ」の原因を捉える知識として、他者の内面への接近可能性をどう捉えるか、自他の相互受容の問題を重要視するか、というカテゴリーの回答が多数を占めていた。また、後者では、「わかりにくさ」の経験事例を分類する際、開示性の有無・自他の視点の相違への気づきの有無、という次元の組合せで他者感情の「わかりにくさ」の経験を分類できることが示されている。原因知識、経験事例というデータの相違はあるものの、これらのデータを分析する際に重要であった観点は、いずれも本研究の孤独感との相関分析から明らかになった①人間の内面の独立性、②人間の相互理解の可能性、と深く関わっている。言い換えると、意識的・能動的に他者を理解したいと考え、理解を試みる過程で我々が体験する問題は、上記のような次元によって記述することができるのかもしれない。今後重要になってくるのは、パーソナリティ特性としてよりむしろ、他者感情の理解過程で実際に生じる認知的・感情的問

題の方にひきつけて「わかりにくさ」の知識・信念を検討できるような手段を開発することであろう。

引用文献

- Batson, C. D., Fultz, J., & Schoenrade, P. A. 1987 Adults emotional reactions to the distress of others. In Eisenberg, N., & Strayer, J. (Eds.) *Empathy and its development*. Cambridge University Press.
- Chandler, M. J. 1975 Relativism and the Problem of Epistemological Loneliness. *Human Development*, 18, 171-180.
- Chandler, M. 1987 The Othello Effect : Essays on the Emergence and Eclipse of Skeptical Doubt. *Human Development*, 30, 137-159.
- Chandler, M., Boyes, M., & Ball, L. 1990 Relativism and Stations of Epistemic Doubt. *Journal of Experimental Child Psychology*, 50, 370-395.
- Davis, M. H. 1980 A multidimensional approach to individual differences in empathy. *JSAS Catalog of Selected Documents in Psychology*, 10, 85.
- 橋本 巖 1987 感情理解に伴う「わかりにくさ」とその発達 九州大学教育学部紀要 (教育心理学部門), 32, 1, 71-80.
- 橋本 巖 1990 a 青年期における他者感情の「わかりにくさ」に関する認知と対処—自己報告の分析— 鳴門教育大学研究紀要 (教育科学編), 5, 269-283.
- 橋本 巖 1990 b 青年期における人の感情の「わかりにくさ」に関する信念と知識—予備的検討— 中国四国心理学会論文集, 23, 32.
- 橋本 巖 1991 感情の「わかりにくさ」に関する信念と青年の孤独感・共感性の関係 鳴門教育大学研究紀要 (教育科学編), 6, 173-186.
- 橋本 巖 1992 他者感情の理解における同一境遇経験の影響—類似経験の利用及び推測の変更との関係— 認知・体験過程研究 2 (印刷中)
- Hoffman, M. L. 1984 Interaction of affect and cognition in empathy. In Izard, C. E., Kagan, J., & Zajonc, R. B. (Eds.) *Emotions, Cognition, and Behavior*. Cambridge : Cambridge University Press.
- 角田 豊 1986 共感性についての研究—映像と質問紙を用いて— 日本教育心理学会第28回総会発表論文集, 506-507.
- 角田 豊 1991 共感経験尺度の作成 京都大学教育学部紀要 第37号, 248-258.
- 加藤隆勝・高木秀明 1980 青年期における情動的共感性の特質 筑波大学心理学研究 2, 33-42.
- 落合良行 1983 孤独感の類型判別尺度 (LSO) の作成 教育心理学研究, 31, 60-64.
- 落合良行 1989 青年期における孤独感の構造 風間書房.
- Russel, D., Peplau, L. A. & Ferguson, M. L. 1978 Developing a measure of loneliness, *Journal of Personality Assessment*, 42, 290-294.